

研究ノート

## 長塚節『土』の「もう一つの文体」考

千 葉 貢

歌人でもある長塚節の唯一の長編小説『土』は、明治四十三年六月十三日から同年十一月十七日までの百五十一回にわたって「東京朝日新聞」に連載されたものである。この間の休載日は八月十六日から二十日までの五日間と、八月三十日、九月二十五日の計七日間だけである。長塚節は時に三十一歳であった。

『土』が「東京朝日新聞」に連載され完結に至ったのは、同紙の文芸欄を担当していた夏目漱石の推挙と激励、編集主幹の地位にあった池辺三山の高配と庇護などの御蔭であり、そうした力添えに促されながら結実した作品である。執筆依頼のために長塚節と直接の交渉や連絡に当たったのは、漱石の大学後輩にして後の作家・森田草平である。

夏目漱石が長塚節の文才や力量を知ったのは、俳誌『ホトトギス』（明治三十年愛媛県の松山で創刊、正岡子規主宰。翌年東京に移り、高浜虚子が編集）を愛読していたからである。漱石がイギリス留学中

（明治三十三年から同三十五年）に、病床にあった子規を慰藉するために書き送った数々の手紙は『倫敦消息』（明治三十四年五月から六月）と題して『ホトトギス』誌上に掲載された（帰国後に書かれた『吾輩は猫である』は、明治三十八年一月より同三十九年八月までの十一回にわたり『ホトトギス』誌上に発表）。この『ホトトギス』に発表した長塚節の写生文や短編小説、とくに紀行文「佐渡が島」（明治四十年十一月、『ホトトギス』第十一巻第二号）が漱石の目に止まり、「二三年前節氏の佐渡紀行を読んで感服したことがある。紀行文であつたけれども普通の小説よりも面白いと思った。」という感想を引き出し、続けて「氏は若い人である。しかも若い人に似合わず落ち着き払って、行くべき路を行つて、少しも時好を追わない。是はわざと流行に反対したの何のとうむづかしい意味ではなくて、氏には本来芸術的な一片の性情があつて、氏はただ其性情に従うの外、他を顧みる暇を有たないのである。（中略）最初余から交渉した時、節氏は自分の責任の重いのを氣遣つて長い問返事を寄こさなかつた。それか

ら漸く遣つて見様という挨拶が来た。それから四十枚程の原稿が来た。今の所余は『土』の一篇がうまく成功する事を氏のために、読者のために、且新聞のために祈るのみである。(中略)余が新しい作家を紹介するのは、ミルを以て自ら任ずるといふより、かかる無責任な評論家の手から、望みのある人を救おうとする老婆心である。」とし、さらには「型に入つた批評家のために閉却され、多忙のため不公平を甘んずる批評家のために閉却されては、作家(ことに新進作家)は気の毒である。時と場合の許す限りそつといふ弊は矯正したい。『朝日』に長塚節氏の『土』を掲げるのも幾分か此主意である。」(明治四十三年六月九月付「東京朝日新聞」といふ理由のあつたことを、『門』の連載を了えた後に「長塚節氏の小説『土』」と題して懇切な紹介と温かい激励を込めて述べている。

漱石は長塚節の力量を信じての依頼であり期待しての見解であると思われる。漱石はすでに、「拝啓 其後は御無沙汰に打過候借先般は森田草平氏を通じて突然なる御願に及び候処早速御聞届被下候段感謝の至に候其後草平君より再度照回<sup>ま</sup>に対する御返事正に拝見致候小生の小説はいつ完結するや実の処本人にも不明に候えどもごく短かくても九十回にはなるべきかと予想致居候只今六十回故今より起草被下候えば小生も安心。」(明治四十三年四月二十九日付、長塚節宛書簡)などと伝えており、この教示に従つて「四十枚程の原稿」が漱石のもとに送り届けられたのだと思われる。「節氏は自分の責任の重いのを」承知しながら、漱石の期待と恩師・正岡子規の遺訓に報いるべき熱い思

いを胸に秘めて書き始めていたのである。その遺訓とは、病床にあつた子規が愛弟子・節に宛てた最後の手紙に託されていた。その文面には「思ふに君の村では、君の家一けんだけ比較的開けてゐて、他は尽<sup>ことごと</sup>く野蛮なのに違ひない。そこで僕の考へるには、君には大責任がある。それは君は自ら率先して君の村を開かねばならぬ。学校も立<sup>た</sup>てるが善い。村民の子弟の少し俊秀ともいふべき者あらば、君は学費を出して(若くは村費を出して)東京へでも水戸へでも出し、簡易農学校位を修業させてやるが善い。其外農談会とか幻灯会とかを開いて村民に智識を与へねばならぬ。委細は面会の節話すべし。一家の私事だけでも忙しいといふやうな能無しでは役に立たぬ。其傍で一村の経営位には任じなくては行かぬ。君は東京へ出て来ることを道楽か何かのやうに思ふて居るか知らぬが、それは大間違ひだ。時々東京へ来て益を得て帰るやうに務めなくてはならぬ。田舎に引込んでしまつてそれで忙しいなどと云つてるやうでは困る。僕などへ物を贈らるるには珍しいものを要せぬ、水戸の名菓などよりは、君が手づくりの大根か蕪の方が善い。今度のやまと芋の如きは甚だありがたく感ずる。」(明治三十五年八月十九日付書簡。子規は翌月の十九日、三十五歳にて逝去。節は時に二十三歳であつた。明治三十三年三月二十八日、子規との初対面から僅かに二年半余り)とあり、同志の伊藤左千夫に「先生と長塚との間柄は親子としては余りに理想的で、師弟としては余りに情的である。故に予は之を理想的愛子と名附けた。」と言われたほど、生前の僅かな月日の間に見事な師弟愛といふ一体感を醸しだし、その死後も

猶揺ぎなかつたのである。かくして連載の準備は虎視眈眈と推し進められていたのである。

長塚節は「小生は自己の資本たる努力は毛頭をしみ申すまじく候骨折ることを以て小生は唯一の武器と心得居り候 田舎者は到底田舎のことを書くより外は無之候」(明治四十年十一月二十六日付、岡三郎宛書簡)と心掛け、身をもって実践した人である。その『土』は「最初はせいぜい三、四十回くらいの約束であったが、六十回になってもまだ終らない。八十回でもまだ結末になりそうな様子が見えない。(中略)当時長塚君は、故郷の実家で執筆していた。私は勿論社内では『土』の評判の悪いことなどは黙って置いたが、池辺さんの褒めていられることだけは通知してやった。それに気を好くしたものが、同君は書きも書いたり、八十回が百回で終らず、百二十回で終らず、到頭百六十何回に及んで漸く結末に達した。まったく途方もない男である。」と、仲介役に任じ編集を担当した森田草平に語られたように、『土』は粉骨碎身の努力によって結実した作品である。果して漱石の期待通りであったのかどうか、真意のほどは分からない。ただ『土』が連載終了後の明治四十五年五月十五日、春陽堂から単行本として発行された時、漱石は『土』に就てと題する懇切丁寧な序文とも解説とも思われる長文を寄せている。それは若くして亡くなった畏友の子規に対する友情であり、その畏友を敬慕する愛弟子への愛情である。さらには「型に入つた批評家」に対する悲憤慷慨を秘め、画一性を拒絶する高潔な心情と孤高の精神を具現、如実に披瀝したのだと思われ

る。そして、『土』は子規の遺訓に導かれ、漱石や池辺三山の激励に促されながら報恩の道に徹しようとしたヒロイックな心意気の連続、刻苦勉励に勤しむ自虐的な実践とに貫かれた身心一如の所産である。堅忍不拔の姿勢は具体的な筆づかいとなつて、『土』の随所に認められる。本小考はそれらの一端である各章の書き出しや結びの「表現」に着目し、身土不二に等しい『土』の「もう一つの文体」を創出する至った作者・長塚節の生き方について迫ってみようという試みである。

## 二

長塚節の長編小説『土』の初版本は明治四十五年五月十五日、春陽堂から刊行された。菊版四百四十四頁、箱入りの上製本で、定価は一円十銭。新聞紙上での連載を了えてから一年半後のことである。

長塚節は『土』を連載中に初出となつたその新聞を毎回切り抜いて綴り合わせて保存していた。初版本を刊行する際には、その切り抜いておいた新聞紙上に黒インキで入念な修訂を施している。この修訂は新聞に掲載した本文の句読点、接続語、会話部分の語句の訂正はもちろんのこと、数行にわたる情景描写の書き替えに至るまで、ほとんど全篇に及んでおり、『土』に寄せた熱意のほどが偲ばれよう。私の手元にある定本全集第一巻『土』(春陽堂、昭和五十一年十一月二十日発行)の「巻末記」には、「この切り抜きは、第一回分が欠落して

いるだけで、他の百五十回分は完全に原形をとどめている。」とあり、「本巻の校訂に当たっては、初版本を底本とし、初出及び前記長塚家所蔵の新聞切り抜きにある修訂本文をもって校合した。」(四百二十頁)というのだから、『土』は「東京朝日新聞」紙上の連載を了えて完結したのではなく、「新聞切り抜きにある修訂文」を加えたものが完全稿であり、定本全集にてその全容が明確になったと言える。従って、作者の意向は半世紀以上もの長い歳月を経てようやく叶えられたのである。

『土』は「東京朝日新聞」の購読者——中産階級以上の有識者と思われる都会やその近郊、あるいは地方都市に住む有産階級層の人々を意識し、毎日の連載という条件のもとで話題の選択や展開、文字遣いから説明の仕方などの表現に至るまで、遍く心血を注ぎ、創意工夫を施したであろうことは想像に難くない。それでも猶、連載終了後には全篇にわたって「修訂」を加えたというのだから、『土』に対する自責や執心などの深い思い入れをも伺えよう。こうした心身一如に等しい筆づかいは、『土』の全体を貫き、詳細な情景描写という独自性に富む作品や作風を紡み、醸し出したのである。その一端は各章の書き出しや結びの「表現」にも込められているであろうことを鑑み、「もう一つの文体」について説明したい。

『土』は全二十八章で構成されている。その第一章は、

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をこうつと打ちつけては又こう

つと打ちつけて皆瘦こけた落葉木の林を一日苛め通した。木の枝は時々ひつくと悲痛の響を立てゝ泣いた。短い冬の日はもう落ちかけて黄色な光を放射しつゝ目叩いた。さうして西風はどうかするとぱたり止んで終つたかと思ふ程静かになつた。泥を拗切つて投げたやうな雲が不規則に林の上に凝然とひつゝいて居て空はまだ騒がしいことを示して居る。それで時々思ひ出したやうに木の枝がざわくと鳴る。世間が俄に心ぼそくなつた。(引用はすべて『長塚節全集』春陽堂、第一巻、昭和五十一年十一月二十日発行に拠つた)

という情景描写で始まっている。引用したのは冒頭第一段落の全文であり、文字通り『土』全篇の書き出しである。そして、第一章の終りは、

お品が自分の股引と足袋とおつぎに提げさせて帰つた時に月はひまかとなり、森の輪郭をはつきりとさせて其森の隙間が殊に明るく光つて居た。世間がしみぐと冷えて居た。お品は薄い垢じみた蒲団へくるまると、身体が又ぞくくとして膝かしらが氷つたやうに成つて居たのを知つた。

とあり、この段落のなかで登場人物の状況や情景、心理状態などの説明を施しながら結んでいる。

続いて第二章の書き出しは、「次の朝お品はまだ戸の隙間から薄ら

明りの射したばかりに眼が覚めた。枕を擡げて見たが頭の心がしくしくと痛むやうでいつになく重かった。狭い家の内に羽叩く鶏の音がけたましく耳の底に響いた。おつきはまだすやくとして眠つて居る。などという文章が続ぎ、やがて「夜は深けた。外の闇は氷つたかと思ふやうに只しんとした。蒟蒻の水にも紙の如き氷が閉ぢた。」という段落をもつて第二章を結んでゐる。以下、数章の書き出しと結びの、それぞれ二、三文づつ抽出し「もう一つの文体」の考察に供したい(漢数字は章を示し、頭は書き出しのこと、結は結びに至る文章である)。

(三)「次の朝霜は白く庭蓋の藁にありた。切干の筵は三枚ばかり其庭蓋の上に敷いた儘で、切干には氷を粉末にしたやうな霜が凝つて居て、東の森の隙間から射し透す朝日にきらりと光つた。白い切干は蒸さずに干したのであつた。」(頭)「お品は喰の日は明日からでも起きられるやうに思つて居た。さうして勤次は仕事の埒が明いたので又利根川へ行かれることゝ心に期して居た。」(結)

(四)「お品の容態は其の夜から激変した。勤次が漸く眠に落ちた時お品は『口が開けなく成つて仕やうねえよ』と情ない声でいつた。お品は顎が釘附にされたやうに成つて、唾を飲むにも喉が狭められたやうに感じた。」(頭)「お品も恙ういふ伴侶の一人であつた。それが今日は其の笑声を後にして冷たい土に帰したのである。」(結)

(五)「お品は自分の手で自分の身を殺したのである。お品は十九の暮におつぎを産んでから其次の年にも亦妊娠した。其の時は彼等の

窮迫の極度に達して居たので其の胎児は死んだお袋の手で七月目に墮胎して畢つた。それはまだ秋の暑い頃であつた。」(頭)「お品は倒れても其時は決して泣くことがない。鉄砲玉は麦藁の籠へも入れられた。与吉はそれを大事相に持つては時々覗きながら、おつきが炊事の間を大人しくして坐つて居るのであつた。」(結)

(六)「春は空からさうして土から微に動く。毎日のやうに西から埃を捲いて来る疾風がどうかするとたとと止つて、空際にはふわくとした綿のやうな白い雲がほつかりと暖かい日光を浴びようとし僅に立ち騰つたといふやうに、動きもしないで凝然として居ることがある。」(頭)「手ランプのぼつと立つ油煙がほぐれた髪へ靡き掛るのも知らずにおつきはそつちこつちへと単衣を弄つて居た。『汝うつかりして、そうれ燃えつちまあぞ』勤次は油煙が復た傾いた時慌てゝおつぎの髪へ手を当ていつた。」(結)

(七)「勤次の田畑は晩秋の収穫がみじめなものであつた。それは氣候が悪いのでもなく、又土地が悪いのでもない。耕耘の時期を逸して居ると、肥料の欠乏とで幾ら焦慮つても到底満足な結果が得られないのである。」(頭)「其晩は其れつ切り二人の間に噺はなかつた。」(結)

以下省略。——かつて福田恆存は田山花袋の『田舎教師』について、『田舎教師』の主人公は林清三であるよりは、私にはそれらの田舎町の風物や生活であるように思われます。『という感慨を「解説」のなかで述べていたが、『土』についても同じような印象をもたれる人も

多いであろう。なぜならば両作品とも、漱石がいつところの「斯様な生活をしている人間が、我々と同時に、しかも帝都を去る程遠からぬ田舎に住んでいる」という悲惨な事実<sup>(8)</sup>（漱石『土』に就て<sup>(9)</sup>）を描写した物語だからである。同時代はもとより、その田舎とは共に北関東 『土』は茨城県南西部、現在の石下町を中心とした鬼怒川沿であり、『田舎教師』は明治四十二年の作品で、埼玉県北東部の熊谷、行田、羽生の各市を中心とした利根川沿に位置する内陸部にて共に展開されており、物語の主題や描写、記述の手法もまた共に自然主義と称されるほど写実的なことから類似性があっても不思議ではない（猶、長塚節は明治十二年、茨城県結城郡岡田村 現、石下町 生まれ。田山花袋は明治五年 陰曆では明治四年、栃木県 明治九年より群馬県 邑楽郡館林町 現、館林市 生まれである。節は家郷にとどまり、花袋は出郷してそれぞれ活躍したという違いがある）。

## 三

烈しい西風が目に見えぬ大きな塊をこつと打ちつけては又こつと打ちつけて皆瘦こけた落葉木の林を一日締め通した。 という『土』の書き出しを改めて紹介するまでもなく、冒頭第一段落のなかに作品全体の特色が結集されているのではないかと、言っても決して過言ではないだろう。各章の冒頭は話題や場所、季節などを転換させ、話題や人物の言動などの展開や運びは結びの段落が担っているかのよ

うに思われるのだがいかがであろうか。その特色とは、冒頭の第一段落をはじめとする各章の書き出しが時候の推移を明示し、その情景を具体的に描写していることである。冒頭の「短い冬の日」に始まり、第六章の「春は空からさうして土から微に動く」に受け継がれ、たちまち第七章の「勸次の田畑は晩秋の収穫へと巡るのである。第八章になると再び「与吉が五つの春に成った」と、新たな季節の訪れを喜ぶ間もなく、第十章にて「秋」になり、第十二章にてまた「冬」が告げられる。「冬来たりなば春遠からじ」とは実にその通りにて名言と思われるものの、第十三章に至っては夏の日ざしを浴びながら躍動する人々の姿が語られることもなく、たちまち「初秋の風」が吹き渡り冬へと駆け足で過ぎて行くのである。

こつと追いかけていくと、『土』は秋から冬、そして春の季節のなかで繰り返されていることが多く、夏の描写は少ない。これが作者が意図したであろう物語の展開であり文体の一つであると言っては軽率であろうか。秋から冬、そして春 この表裏一体をなす季節を生きることが『土』のなかの登場人物たちに限らず、生きとして生けるものたちの生命であり必然である。その必然を受け入れるための活動によって人生という物語が創られるのである。長塚節は言っている 「春は冬に遠くして又冬と相隣して居る。」（第十一章の結び）と。この一文は作者の節がその家郷にて体得した実感であり、勸次一家の実情を如実にもの語っている。我々の人生の春もまた、やがて来る冬を受け入れる他はないのである。

文体 中村明の「文体は読者が自分の内部に育成した言語感覚と密接にかかわるが、無論、感覚そのものではない。文体はどこかに静的に横たわっているものではなく、作品を通して読者が作者とぶつかり合う行為の過程で現象として成立するものだと考えるべきである。」<sup>(16)</sup> という見解や、同じく「作品印象がそのまま文体印象ではないように、作品の言語的特徴が必ず文体的特徴になるとは限らない。(中略) 真正な意味での文体は、読者のスタイルがつかみとった、言語面での作者のスタイルであり、その背後に感じとった作者の生き方であると言っておこう。」「この作品がどうしようもなくしみてくるのはなぜか。二つの魂をつなぐ意思のようなものがあるからではないか。その意味で、個性的にとらえられた文体も、大きな展望においては、普遍への思い思いのアプローチであると考えられるのである。」<sup>(17)</sup> という説明などを一読するに及んで啓発され、さらには「小説の真実は小説によってしか表現できないものである。たとえ直観によってしか知り得ない真実であろうと、文学はそれをことばで表現しなければならぬ」という点で、知性的な要素が加わっている。それでなければ文体的存在理由も消える。小説は元来作り話であり虚構である。さらに、それをことばによってしか表現できないという点に、第二の虚構がある。<sup>(18)</sup> という考え方にも教えられ、学びながら私なりに『土』の文体について考察してみようと思ったのである。

そこで私は『土』全体を概観してみると、総振り仮名つきの漢字表記にして漢語が多い、意味仮名(熟字訓も含む和脈化)が多い、量

語が多い、音象徴語(擬音語、擬態語、擬情語)が多い、方言(特に会話に)が多い、比喩(直喩、擬人法)が多い、踊(躍)り字が多い<sup>(19)</sup> などという一目瞭然の「客体的文体論」を越えて、身土一体とも言うべき「土」と共に生きる小作人一家の、冬から春にかけての暮らしぶりや言動、情景などを克明に描写し、しかも予定を遙かに越えて連載し続けた作者の姿勢、自負、自責、自虐、執心、情熱、拘泥、心意気などもまた、「土」いう物語に秘められ、作品を貫いている、「もう一つの文体」なのではないかと言いたいのである。長塚節は『土』を執筆する前の短編小説『炭焼のむすめ』という作品について、「炭焼の娘を書きし時は稿を改むること前後六回程にて、八頁のものに六ヶ月を費し申候 恥をいはねば分り不申候へ共事実此の如く候」<sup>(14)</sup> (明治四十一年九月二十日付、久保田俊彦(島木赤彦)宛書簡。猶、短編小説『炭焼のむすめ』は明治三十九年七月二十五日発行の『馬酔木』創刊三周年記念号に発表したものである)と伝え、「それは小生自ら近來全く散文的の頭脳に相成、歌に全く絶縁致し来り候故に有之可申候」<sup>(15)</sup> (明治四十二年九月十四日付、佐久間政雄宛書簡)とも伝えてい

る。その少し前には「余は天然を酷愛す。故に余が製作は常に天然と相離るゝこと能はず」<sup>(16)</sup>、「写生断片」の冒頭、明治四十二年一月二十五日発行『為桜』第三十六号)と強調し、「真実を離れて文章はない。文章の値打は人を動かすにある。人を動かすのは真実以外に何物もない」<sup>(17)</sup>、「写生文をつくれ」。明治四十四年七月二十五日発行『為桜』第六十五号)などという信念に貫かれており、具体的な描写や表現を創

出した感性、創作に取り組んだ動機づけ、生来の資質などに包まれて引き出されたのが、表現という字面を支えている「もう一つの文体」なのである。その「もう一つの文体」は身心一如、身土不二に等しい作者の生き方によって創出され、生き方の投影であったと言いたいのである。話し方も含めた人それぞれの「文体」は、その生誕の地にて授けられ育み培い、そして蓄積した教養の具現である。長塚節に於いては、『万葉集』以来歌枕として歌われてきた「筑波山」を朝な夕な身近に眺め、同郷人として「東歌」に寄せる歴史的な共感が、郷土に對する深い愛情（郷土愛）や自負となつて書き貫かれたであろうことをも強調しておきたいのである。筆づかいは心づかいであり、文字の乱れは心の乱れである、というのが私の主意であり結論である。

(ちば みつぎ・高崎経済大学地域政策学部教授)

注

- (1) 『漱石全集』(岩波書店)第十一卷、二三八―三三九頁。
- (2) 注(1)に同じ。第十四卷、八二頁。
- (3) 『子規全集』(アルス)第十五卷、三九一頁。原文には句読点はない。
- (4) 『左千夫全集』(岩波書店)第五卷、一九四頁。「正岡子規君」より引用。
- (5) 『長塚節全集』(春陽堂)第六卷、二一四頁。
- (6) 『平輪光三』人間 長塚節(角川書店)六十八頁。
- (7) 『田山花袋』田舎教師(新潮文庫)二五八頁。
- (8) 『長塚節全集』(春陽堂)第一卷、五一―六頁。『漱石全集』(岩波書店)

では第十一卷、五九二頁。

- (9) 花袋の生年月日については、花袋誕生直後に実施された暦法の改正によって二通りの記述があるので注意されたい。詳細は、拙著『田舎者の文学』(高文堂出版社)一五五頁を参照していただければ有難い。

- (10) 中村明『日本語の文体——文芸作品の表現をめぐって』(岩波書店)一六二頁。

- (11) 中村明『文体における個別性と普遍性』より引用。『文体論の世界』(三省堂)二九―三〇頁。

- (12) 東田千秋『小説の文体』より引用。『文体論入門』(三省堂)五十五頁。

- (13) 『土』の文字づかひや単語などの表現については、かつて私なりに考察し、断片的ながらもまとめてみたことがあるので参照していただければ有難い。拙著『可憐命の文学』(双文社出版)一五五頁以下、及び一七六頁以下の各章。また、同じく拙著『近代』と闘った人びと(高文堂出版社)一七七頁以下の章。

- (14) 注(5)に同じ。第六卷、二五六頁。

- (15) 注(5)に同じ。第六卷、二九六頁。

- (16) 注(5)に同じ。第五卷、三十三頁。

- (17) 注(5)に同じ。第五卷、五十九頁。

附記 本小考は、日本文体論学会、第77回大会(平成12年6月11日、明治大学神田駿河台校舎)にて口頭発表した要旨に加筆したものである。